

Japanese Ethno-history of Kappa (the most popular mythical water monster) and the Shibues of the Hizen and Higo Domains as its Masters (Part 1): Prolegomena

KOMMA Toru

Abstract

Though countless academic and non-academic writings on Kappa exist, most of them try to answer the question, “What is Kappa?”, by merely referring to some fragments of information casually appearing in some types of literature including only a few lines in old dictionaries and miscellaneous essays composed mainly by literati in the post-Edo period. This style could be designated as an objective approach to the question, or one from the outside.

Besides, the author of this particular paper would like to add another systematic approach from within, or attempt to grasp the essence of the topic, “What is Kappa?”, directly through the analysis of the long history with full of ups and downs of the Shibues, who began worshipping Kappa in the north-western Kyushu, the Hizen and Higo Domains, to have been taking charge of it even up to the present time. This could be viewed as a subjective approach.

This unique combination was facilitated by a 10-year long investigation of the voluminous literature that was long kept untouched by four families among the Shibues in the two Domains mentioned in the title.

In Part 1, subtitled “Prolegomena”, the author first reviews the noted academic contention between YANAGITA Kunio, the founder of Japan’s single-state folklore, and a then distinguished anthropologist (or comparative ethnologist), ISHIDA Eiichiro. Second, he goes back to the above-mentioned conventional approach from the outside to critically review it. Subsequently, he shifts to the main subject as below.

The author hypothesizes that the Shibues built the “great tradition”

of the proto-Kappa worship, possibly in the early Kamakura period, and it sequentially expediated the formation of several types of “little traditions” of it in various villages in the periphery, mostly in Western Japan, particularly Kyushu.

河童のエスノヒストリーと肥州渋江氏（その1）——方法序説

小馬 徹

はじめに

この国は言霊のみならず、各時代を通じて様々な「神なる妖怪・妖獣」の「幸わう」国でもあり続けて来た。ことさらにトトロに言及するまでもなく、AI万能の現在も、グローバルなポップ・カルチュアでは世界に冠たる「神なる妖怪・妖獣王国」の地位を譲ってはいまい。

伝統的な文脈では、鬼、天狗、河童がその主役の座を占めて来たと言える。ただ、山岳信仰を体現する修験者をモデルとした天狗は、権威的でもあり、庶民の寄せる親しみがやや薄い。鬼は元来、年ごとに他界から来訪して子孫を戒めつつ幸をもたらす祖先神でもあって、今もナマハゲを初め、各地の民俗慣行で生きている——いわば、日本版サンタの如く。その一方、酒呑童子の造形の過剰な成功が、その後、恐ろしい一方の鬼のイメージを決定的なものにした。さらに一寸法師や瓜子姫のような「小さ子」説話の一類型である桃太郎説話は、富国強兵

の明治時代以来軍神説話化して、鬼を一方的に悪者へと追いやった——「鬼畜米英」の殺し文句に見る如く。

生活に何よりも不可欠な水の精霊である河童には、太古の暮らしの余韻が宿っている。けれども、江戸後期の「妖怪革命」（香川雅信）の舞台に躍り出、その後柳田国男や芥川龍之介らが何かと「引き立てた」ことが、今に続く大衆的な人気を決定的なものにした。研究論文に限らず、最も人間的な陰影に富む妖怪であるその河童を論じた文章は既に数多く、枚挙に暇がない。

ただし、肥前・肥後の洪江氏各家が、（或いは鎌倉初年からも言えるほど）古くから今に到るまで、一貫して河童信仰を担い続けた歴史的事実が不当にもほぼ看過されてきた。筆者は、小稿（連載）で同氏のいわば「河童を生きた」長い歴史に強い光を当て、河童に宿る固有の人間の陰影の解明を一層深めようと努める。

一、長めの助走（1）——「河童の人類学」再考

先ず、小稿が筆者の専門とする社会人類学の伝統に根ざし、その流れに掉差すものだと宣言しておきたい。第一章では、この立場から、広義の人類学による従来の河童研究が看過してきた一、二の根本的に重要な問題点を浮き上がらせる——筆者の志向性を明確にしておくために。

1. 「河童駒引」のトートロジー

人類学は、河童と浅からぬ因縁を持つ。嘗て、（民俗学や民族学を包摂する）我が国の広義の人類学史上でも

稀に見る或る一大論争では、河童を恰好の焦点として、求心的な民俗文化と遠心的な人類文化の相互関係についての学問的な認識のあり方が大きく問われた。そして、「河童」の相貌もまた、その志向性によって全く異なるものにさえなると論じられたのである。

事の発端は、石田英一郎が比較民族学の著作として『河童駒引考』を著し、その果敢な標題の通り、柳田国男の『河童駒引』を壮大なスケールで駁したことにある。石田は、我が国の民俗学を一国民俗学（新国学）として樹立した一代の碩学柳田国男に対して（国家の枠組みを超える）比較の目を持つべきだと強く迫った。社会人類学を専門とする筆者が、この学史的な事件の意義を看過して何も字ばねば、赤子ごと盥の水を流す浅慮と誇られよう。

そもそも河童を大胆に学問研究の組上に乗せると共に、現代日本の庶民文化の表舞台へと一躍引つ張り出してみせたのは柳田国男であったと言える。彼の民俗学研究（郷土研究）でも初期の論考の一つである、一九一四年初版の『河童駒引』（後に『山島民譚集』に収録）こそが、そここの川や沼に茫洋とまどろんでいた有象無象の水の主、或いは水妖・水魅たちを概念的に一気に統合し、現今の平準化された「国民的」河童像へと鑄上げの原動力となったものであった。当の柳田は、『河童駒引』で河童をこう捉えて自らの出発点とした。

「河童出現ノ事実ノ書史ニ見ユルモノ、甚ダシク近世ノ二三百年ニ偏レルコトハ（中略）大ナル疑イノ種」であり、また「渡来発現ノソレラシキ記事」も見当たらず、「今後尚幾多ノ憶説ヲ存立セシメ得ベキ余地アリ」。しかし、「何人モ認めザルベカラザル一事アリ。何ゾヤ。曰ク、諸国ノ碧潭ニ棲ミテ、時々馬又ハ人ノ子ヲ水ニ引キ込マントスル物ハ河童ナリ」（柳田 一九八九、九八、傍線は小馬）。そして、この断言に次の宣言が続く。

河童ニ異名多シ 河童トハ本来何者ナルカ。少クモ我々ノ多数ハ之ノ問題ニ答エンガ為ニハ、是非トモ順序トシテ河童ノ別名又ハ方言ヲ比較考察セザルベカラズ。予ハ此迄ハ便宜上東京語ヲ用イテ之ヲ「カッパ」ト呼ビタレドモ、是レ単ニ此ノ物ノ名称ノ一種ニシテ、比較的弘ク採用セラレテアル者ト云ウニ過ギザルナリ。予ガ如キモ幼時之ヲ「ガタロ」ト称エタリ。

(柳田 一九八九、九八一―九九)

柳田のこの一見軽妙な「宣言」の裏に隠された重大な問題の核心は、愚直に言えば、何故いきなりこうも無前提に「河童ニ異名多シ」と言い切れるのかにある。柳田は、「河童トハ本来何者ナルカ」と、近代科学に通有とも言うべき対象定立的な問を立てて疑いを些かも差し挟まず、次いで「東京語」の河童を借りて設けた単一の「河童」概念の外延に、日本全国の残余の水妖たちをほぼ残らず取り込んだのだ。柳田はこの手順を積極的な方法として自明視し、かくして「河童ニ異名多シ」という命題の正当性を担保したとでも言うべき論法を採つたのである。

しかしながら、これはやはり自己言及的な循環論法であって、固より「河童ニ異名多シ」という主張は、依然として確かな根拠を欠き、「順序トシテ」おかしい。この主張は、柳田の直観的な一仮説として、やや距離を置いて取り扱うのが適切である。

ここで欠落しているのは、「多シ」と断言された個々の「異名」「別名」「方言」が実際に異名(同一の対象Aを指す名辞群X_n)なのかどうか、また「異名」「別名」「方言」の概念の異同、ならびに個々の水妖・水魅が相互

にどんな関係にあるのか等の問を立てて現場で実証的に検証する、地道でも必須と見るべき手順なのである。

狭い「同じ」地域に複数の異なる水妖・水魅が棲んでいる例も少なくない。右のような往復的な検証作業の中でこそ、先入観（対象定立的で無前提な直観的・独善的な判断）を超えて、人々の複雑で豊かな経験の蓄積の内に掬すべき発見を得ることが期待できるだろう。河童論は、そんな発見に靈感を得た一層の相互参照（正しい意味での比較）を基盤として動態論的に展開するべきなのだ。

柳田が列挙した各地の「河童」の「異名」（ないしは「別名」「方言」）の中には、いわば虚心坦懐に見れば、ガメ、カワツソ、エンコウ、メドチ・ミンツチ等、各々亀か鼈、獺、猿（猴）、蛟（水龍）を一義的に表す諸語が並んでいる。すると、それら区々別々の諸存在と河童とを軽々しく無前提には同一視し得ない、と判断するのが人情の最も自然なあり方であろう。ことさらにフッサールに拠らずとも、全ての認識が先ずは主観的に初発することを疑えないがゆえである。

2. 河童無き富山（越中）のガメと河童

ここで議論の勘所を簡潔で、且つ鮮明なものにするために、敢えて筆者（現地での長期参与観察を方法的な研究基盤とする一社会人類学研究者）自身の直接的な経験を参照してみたい。それは、自らの民俗学を郷土研究と規定し、各々の土地での伝承採集を研究の根幹として最重視せよと弟子に厳しく令した、柳田自身の周知の手法にも、次のごとくよく通じているはずだ。

柳田は、土地の伝承の採集者を①旅人、②寄留者、③住民（居住者）の三つに分類したうえで、人々の心

〔心意〕の内奥にまで透徹する伝承の採集を可能にし得るのは、③でしかあり得ないと力説して止まなかったからである。

社会人類学徒たる筆者は、無論、柳田のその狭くて頑な見解に安易に同意することはできない。人は自らの心理に最も良く通じているとは限らず、また住民がその地域を統合的に最も深く理解しているとも必ずしも言えない。これは、大方の人にとって平凡な経験的事実であろう。筆者は、現地に長く住み込み、人々と暮らしを共にしつつ一社会（共同体）の文化の内側から人々の営みを彼ら自身の視線で見通すと共に、外部の視線と絶えず往還しつつ、「現地で現地を考える」社会人類学の方法と実践に深い信を置く。『郷土研究』誌に徴しても、柳田が養成に努めた住民たる伝承採集者諸氏の大方は片々たる短報が、社会人類学者の報告に見る省察を凌ぐとは、恐らく誰も言えまい。

ただし、住民の経験が最も直接的で、分厚いものであり得るのは紛れもない事実であり、広く郷土研究者の養成に努めようと試みた柳田の——成果そのものではないが——意のあるところはよく理解できる。それゆえ、ここで筆者自らの次の体験を披瀝するのも強ち無駄ではあるまい。

さて、戦後間もなく富山県西部に生をうけ、漫画に熱中して河童を愛した——だから視力を損なつたと母に叱られ続けた——少年は、後年『河童駒引』に出合つて刮目するその刹那まで、足下に河童がいたとは思ひもよらなかつた。同書は、「越中富山ニ於テ河童を『ガメ』と称スル」（柳田 一八八九、一〇〇）と書く。それは、筆者の無知を暴く全く衝撃的な一条であつた。

日々の遊び場だつた古城（高岡城址）公園の升形の一際深い堀には子供を引くガメが棲むとされていて、母校

の校長や担任は夏休み前には、決して近づくなと警告することを怠らなかつた。そのガメとは唯々怖い老鼈で、人を引く以外、土地の者誰の目にも河童の内包にほぼ無縁な存在だった。

ところが、小学校入学間もない頃だったと思う、古城公園に巨大な河童が突如現れた。その青銅製の座像は、今日の平準的な河童イメージに沿う造形ながらも小柄ではなく、成人男性に二回りも三回りも優る巨大で滑らかな肢体と剽悍な表情を持つものだった。今にも豹変・変化しそうな怪しさをうつつすらと纏い、写実的で内に力を秘めた滑らかなフォルムが実に美しかった。

ただし、それは当初人通りのある小径の傍らに堂々と陣取っていたが、何時の間にか公園内の射水神社境内の目立たぬ一角に移され、さらにその社屋の裏側に越して久しく草に埋もれて半ば放置され、すっかり忘れ去られていたと思う。今では、杳として行方が知れない。

この河童像は、地元高岡に生まれ、東京美術学校彫塑科で高村光雲に師事した彫刻家米治一（こめ・じいち、一八九六―一九八五）が地元に戻って鋳物の原型師となり、一九五四年一月二日に制作を完了したものと判っている。治一は、銅鋳物の一大特産地として古くから聞こえる高岡で以来長く重きをなし、生涯に一千を超える「原型」を作って郷土の産業と文化の発展に貢献した人物として知られている。

さて、その治一が制作した全く趣が異なる別の河童の銅像が、熊本市の繁華街上通り五丁目の書店である金龍堂まるぶんの店頭に存在する。左右に子河童各々一頭を従えて胡座をかく、成人女性程の痩せぎすの体軀のその河童は、膝の上で法界定印を結ぶ。獣らしい風貌の顔は窶れ気味。下向きの目線は曇って暗い。傍らの石塊中の銘板に刻まれた「河童像 作意」と題する治一の短文は、過去の悪夢悪行を禪によって清める姿だと告げている。

一九七〇年一月二日に完成した、治一、七四歳の時の作で、或いは彼の晩年の心境を託した作品でもあったろうか。

設置の経緯が、地元紙の記事（『熊本日々新聞』二〇〇九年五月一日）で分かる。経営担当者は、熊本の水をメイン・コンセプトとしてこの新設店のデザイン構想を立てた。ただ、噴水のミニユメントの扱いに窮し、開店を目前にして、打開策を求めて博多のデパートのフランス古美術品即売会を妻共々訪れたが、無駄足だった。だが、ふと立ち寄った同地の美術品店で「異様な河童の像が私の目をとらえて離さなかった。まったく偶然の出会いである。（中略）外を通る人がほとんど例外なく河童像を眺め、子供は『あ、カッパだ！』と声を上げ、指さして親に話しかけていく。『これだ』と思い、妻の顔を見ると、笑ってうなずいた」。美術品店の本社に駆けつけてその非買品の買い取り交渉を是非にと依頼、一週間後に治一から受諾の書簡が届いた、云々。なお、その河童像は上通り商店街の守り神として今も愛され続けていると言う。

古城公園の河童の圧倒的な生命感からは遠いその貧相な河童像が、完成直後に博多ですぐに人の目を捕らえ、ほとんど間を置かずに移転した同じ九州の熊本では、街の人々の日常と心に滑かに溶け込んだ。両河童像の運命の対照は実に鮮烈で、「河童二異名多シ」とする、上記の柳田の河童概念に対する筆者の懐疑を様々な形で深めさせることになったのである。

ところで、江戸後期に大田南畝が、九州では余国と違って河童が多いと書いている（『半日閑話』）。また、大きく時代が下がるが、九州長崎に生まれ育った歌川龍平は自著『長崎昔話』（長崎文学社、一九四八）にこう書く。「河童は、わたしどもに信仰に近い存在である。（中略）どこかいたづら小僧らしいおどけた姿は、たしかに、

日本人のもつてゐるある一面を表現した微笑ましい存在だと言ふことができる。わたしは小さい時から、町の古老に河童の話をよく聞かされた」（同、三〇、傍線は小馬）。

長崎の河童は、怖い一方のガメが居座っていた高岡とはまさに別世界の住人の感がある。やはり、日本の到る所にいる河童が多数の異名で呼ばれるとする宣言は、一度は疑い、慎重に再考を試みるべき、柳田独自の「仮説」ではないだろうか。

3. 辺りを払う柳田の河童観

さて、仮に柳田の説を容れて「河童ニ異名多シ」と見た場合でも、その（新たな）河童概念の外延は余りにも幅広いと言える。他方、その内包も実に多岐に亘り、一部相矛盾もし、高い統合を見てはいない。もともと『河童駒引』には、各地の河童文献からの随意で豊富な引用と前例踏襲主義を常とした江戸時代、特にその後期に現れた本草学ⁱⁱ博物学的な諸説の方向性を助長して集成・統合した妥当なものだという見方も、無論あり得よう。

そこで——神奈川大学図書館所蔵の——朝川鼎（一七八一—一八四九）著、『善庵随筆』（一八五〇）を一例として取り上げて検討してみよう。（なお善庵は、強く請われて、藩制期に洪江氏の本拠となる肥前大村藩に出仕した点で、小稿と浅からぬ縁がある）。彼は、「水中ニテ人ヲ捕り殺スモノニツアリ」として「河童」「鼈」「水蛇」を挙げ、水死体を検分すればその違いが歴然と分かると書く。河童なら屍の口が開いて笑うが如くであり、水蛇ならば歯を食いしぼり、鼈では脇腹の章門（のツボ、小馬注）辺りに爪が食い込んだ跡が残っている。どの場合も、口から飲み込んだ水が排出されて屍の肛門が開くのであって、それゆえに「世人肛門ヨリ入りテ臟腑ヲ

食フト云ハ非也」と断じる。この一例に徴しただけでも、柳田的な河童観が必ずしも広く一般に流通していた整合的な共通理解をそのまま忠実に提示したものではない、と予想できそうだ。

ただし、筆者の割り切れなさを余所に、それら土地土地の亀、鼈、獺、猿（猴）、蛟等、従来の有象無象の水妖・水魅どもも、今や柳田の絶大な威光の下で、既に彼の「河童」概念に包摂され、均されて、易々と河童伝説異版の主人公へと変身し、「零落した水辺の小童」モチーフを代表する「河童駒引」話にも回収されてしまった。既に、庶民文化の一部としてこの形で定着していると言えるだろう。

柳田はそれと共に、河童概念の内包と幾分でも重なる、海外の諸事例の参照を厳しく戒めた——石田とは、何と対照的な姿勢だろうか。彼にとって、河童の外延は幅広くても、それに連なるモチーフを仮りににも適用するべき対象は（ことに現代的脈絡に於いては）厳に日本国内で完結するべきものであったのである。

言語学者、田中克彦が指摘した（田中 一九九四、三〇三）ように、柳田主導の新しい河童イメージが滑らかに国民的な知識伝承の一部となるうえで強力な一契機となったのが、芥川龍之介の短編小説「河童」（一九二七年）の盛んな人気ぶりであった。芥川は（17に分かれる節の「九」で）河童と化したその主人公に、ゲエルという名の河童の発言を受けて、「河童の強敵に頼のいるなどと言うことは『水虎考略』の著者はもちろん、『山島民譚集』の著者柳田国男さんさえ知らずにいたらしい新事実」だと言わせている。その軽妙な揚言が、柳田の提唱する河童概念の社会的な認知とその普及・促進に大きく貢献したのは、恐らく確かだろう。¹⁾

柳田自らが何故かその原稿を長く筐底に秘し、また自ら「珍本」と呼んだ片仮名交じり漢文体の『河童駒引』は、「三十年も昔」の一九一四年に五百部だけ刷って「知己同好に頒った」（同著一九四二年版の「序」）に過ぎ

なかった。その『河童駒引』が、戦時中の一九四二年に増刷・再刊されると——九州を起点としてやがて一九五〇年代に各地に勃興し、その後幾度か繰り返されることになる——河童（族）プームの、一つの強力な火付け役となったのである。

そして河童は、漫画やアニメ、子供向きの絵本に見るように、今や日本の庶民文化の、無くてはならぬ重要なキャラクターの一つである。この事実自体は、文化現象として実に興味深く、一つの豊かな研究対象でもあり得る。しかしながら、その現象の淵源にまで遡り、河童概念の歴史的な形成と展開を踏まえて論じようとする限りは、先述した通り、柳田の河童観を徒らに崇め、無批判に受容するべきではない。

4. 石田英一郎、河童の箍を外す

ここで問題の人類学上の大論争に立ち返れば、それは、後に東京大学に米国の文化人類学を招来して戦後人類学界を一新することになる石田英一郎が、敢えて『河童駒引考』（一九四七年）という誠に大胆で挑戦的な標題の一書を著して広く世に問うたことで生じたものだった。

石田は同書の「新版序文」に於いて、「世界や人類を一体として見る」「古代文化史研究」（石田 一九九四、七）であると自著を規定する。その石田の見地では、河童駒引は、ユーラシア大陸南縁部に展開した先アリア文化地帯の古層を成す農耕的文化複合（「月―太陽―女性―牛―豊穡力―水崇拜」）に固有な、（馬ならぬ）牛を水精に捧げる豊穡儀礼の伝承モチーフの後継の一異版と見做せるとする。そして、後に遊動的な騎馬民族が南下して来た地域では、馬が牛に取って代わる。これらを背景とすれば、日本の河童駒引伝承で往々牛が馬に置き代

わっているのは、日本文化の古層が発現している一露頭だと解せると言うのである。

石田は、その「第一版序文」で自著の意義を方法論的に次の如く解題している。

河童駒引といふ様な我が山村僻陬の民間伝承を捉へ、之を欧亜大陸の東西に互る資料と比較しつつ、問題を人類文化史の重要な一側面にまで展開せしめた本書に、もし取るべき意義があるとすれば、それは主として、人類文化なるものが時間空間の両面に互つて一個の連続した全体を成してゐるといふ認識に、新しい証憑を提出した点にあるであらう。

(石田 一九九四、一七、傍線は小馬)

ここに、先に見た柳田の河童観に透けて見える「一国民俗学」の「新国学」としての狙いや方法、そして実践と真つ向から対峙した、石田の問題意識の強烈で挑発的な発露がある。要するに『河童駒引考』は、柳田の『河童駒引』に対する『河童駒引考』、すなわち、「一国民俗学」に対する「比較民族学」の立場と方法を主張した、マニフェストな著作」(田中 一九九四、三〇七)であつたと言えるだろう。確かに、石田は「第一版序文」で次のように言明した。

民族学は、民族 \parallel 種族に出発するが、個々のエートノス(民族的・「種族」的単位の基盤、小馬注)の歴史的構成の完き把握には、世界的規模に於る比較研究から得られた全人類史的認識を前提とせねばならぬ。

本書が柳田先生等の日本民俗学と我々の比較民族学との関係を中心に、特に力を入れたのもこの点である。

（石田 一九九四、一九、傍線は小馬）

なお石田は、「新版序文」で柳田の「一国民俗学のみならず、恩師ヴィルヘルム・シュミット等の広域的な「文化圏説」文化層の図式による文化史の復原全般」にも真正面から疑問を呈し、「十九世紀や二十世紀の事象を一万年も昔の習俗のそのままの残存または連続と判定するには、もつと説得力のある証明が必要であろう」（石田一九九四、一五）と、齒に衣を着せぬ批判を加えた。彼は、一人の誠に過激で果敢な「戦士」だったと言えよう。人類文化志向の石田が目指す比較民族学では、論及するべき対象が常に「エートノス」から全人類へと開かれ、必要な分類的枠組は、設定も切り替えも、主題に即して中立的で自由たり得る。だが、他方、（特に或る極めて困難な国際政治状況下では）多少とも政治的・領土的な関数とならざるを得ず、それゆえ絶えず学問の外部からの求心的な同調圧にも曝されて緊張を強いられる一国民俗学的な研究は、得てして、局所的な狭小さと窮屈さを免れ得ない。柳田を一面で深く尊敬しながらも、石田の批判は、一九五七年の民俗学研究所の解散にも繋がるほど、断固たるものだった。

こうして、実際石田は、柳田の伝承研究の一群を、比較民族学の立場から大きく発展させた業績で世に知られることになる。それを象徴するのが——『河童駒引』に対する『河童駒引考』と同様に——『桃太郎の誕生』に対する「桃太郎の母」であろう。

この事実の一方で、（石田の東京大学での最初の学生だった）人類学者川田順造は、柳田には一国民俗学の創設に固執しながらも、大きな志と共に優れた先見の明があり、世界民俗学の視野をも合わせ持っていたと高く評

している。つまり、当時の日本の場合は当面一国民俗学でなければ駄目だが、それが将来世界民俗学になる日を信じ、それを望むと語っていたと言う（川田 一九九七、六一―六二）。

その川田はまた、民俗学研究が「近代国家の形成と結びついて、『近代』の中で初めて自覚的に生まれたものだと言える」とし、「それを民俗学として自覚的に興そうとする意志、それはグリム兄弟にしても、セビオにしても柳田（の「経世済民」、小馬注）にしても、そういう民俗学の志というものは政治性を帯びている、ないしは時代の政治状況に結びついていると思う」（川田 一九九七、六一）と述べている。深く傾聴に値しよう。

これは、柳田が単一の河童概念を措定した背景として、当時、国際政治の単位と見做されるようになっていた「二国一民族一言語」を柱とするネーション建設に対する志と強い責任感があったとする筆者の見方を支持する、冷静な評言である。ただ、筆者が今新たな河童研究の展望を切り開くには、川田のその論評を尊重しつつもなお、柳田が（時代状況によるとしても）抱え込まざるを得ず、その結果彼の河童観に些かなりとも陰を落としていたであろうナショナルな傾きを、方法論的に洗い出して中和しておく必要がある。

5. 河童のエスノヒストリーへ

ただし、そう述べる筆者の河童への視野は、比較という点では石田が厳しく批判した柳田よりもさらに求心的で内向的だとする批判も、当然あり得えよう。もつとも、予想されるその批判への（先回りのな）「反批判」は、本章第1節で既に明らかにしている。つまりそれは、「河童」の「異名」「別名」「方言」が実際に異名（同一の対象Aを指す名辞群X_n）かどうかを、現場で実証的に検証する往復的な作業による発見の相互参照こそが、正し

い意味での比較たり得るのだという主張である。

これは柳田のみならず、密かに石田にも差し向けられた批判でもあった。なぜならば、両者の研究は共に現地（参与）調査に依らず、専ら文献に一方的に依拠しているからだ。「感情移入が素晴らしかった」けれども、「事実柳田国男自身がやったことは、外からのそれもほとんどみな通りすがりの旅の見聞や土地での滞在はごく僅かの聞き書き」（川田 一九九七、六二）に過ぎなかつたことは、誰の目にも明らかなのだ。

実は、その動かし難い事実に対する柳田自身の密かな自覚（ないしは負い目）こそが、彼をして『河童駒引』を長く篋底に眠らせると共に、「住民 \equiv 心意」至上主義へと方法論的に短絡させてしまった決定的な要因だったのであるまいか。

一方『河童駒引考』「第1版序文」は、返す刀で当時の世界の人類学の新たな潮流を、こくも批判する。「民族的 \equiv 種族的単位集団を問題とせず、又時の深さから切り離した現在のみを対象とする人類社会一般の分析は、寧ろ社会学の任務に属するであろう」（石田 一九九四、一九一〇、傍線は小馬）。

『河童駒引』は——民俗学とは目に一丁字無き常民のための「もう一つの歴史学」だと強弁した柳田自身の言葉とは裏腹に——専ら膨大な諸歴史資料を涉獵博覧して書かれた。ただし、それは遠く先史時代に遡る石田の研究ほどの時間的深度は無いものの、それなりに日本史の厚みを背景に持つ。他方、アフリカを初め、主に伝統的に非識字的な社会での現地参与調査を基盤として立論する英国流の社会人類学は、歴史をほぼ欠き、いわば「共時的」研究であるという点で、確かに或る限界を持つ——石田が東京大学に導入したのが英国社会人類学でなく米国文化人類学だった理由も、恐らくはここにあろう。石田の批判の主眼は、むしろ社会人類学に向けられてい

たとさえも言える。

そこには、石田の絶対の自信が窺えるのだが、改訂を経た『河童駒引考』の「新版序文」では、社会人類学への右の辛辣な批判を全く拍子抜けするほどあっさり撤回している。そして、前述の英国社会人類学の構造Ⅱ機能主義への自らの原則的で頑な批判展開の経緯を、こう述べた。

（自著の、小馬注）第一版の序文を読むと、著者はいわゆる社会人類学的な学問傾向に対し、いささか肩を怒らせて、文化史的民族学の立場とその存在理由とを擁護しているかに見える。しかし私は、その後の理論的な著作の中に明記しているように、元来、この二つの立場をそれほど対立的には考えていない。構造的・機能的な分析と把握なしには、真の文化史を構成できるものではなく、歴史的なプロセスと背景を無視して文化の構造的理解に達することは不可能である。

（石田 一九九四、一一一）

今更ながらの観はあれ、それなりに冷静で、ごく穏当な見解と言えらる。そのうえで石田は、米国（総合）人類学のエスノヒストリー論に言及し、さらに肯定的で入門的な解題を加えている。

（この学説は、小馬注）これまで比較的最近のフィールド・ワークの結果だけを重視して、調査の対象とした部族に関する幾世紀もの過去の記録が存在しても、これを利用しなかったことへの反省から出発したもので、主として歴史学者と人類学者の双方から無視されてきた過去の文書資料の組織的な利用による民族史

の研究を意味し、これがさらに考古学の遺跡遺物をはじめ、一切の存在する材料を併せて活用しようという方向に進んでいるようである。そうすると、私がここで言う文化史の概念に極めて近いばかりでなく、いわゆる歴史家のすべてが顧みない説話の断片のようなもので、文明民族の遠い昔の記録の中から探り出して、それを本書で試みたような方法で文化史の資料に役立てることも、またエスノヒストリーの仕事に入るべきものであろう。

（石田 一九九四、二二—二三）

6. 河童信仰の「大伝統／小伝統」

筆者も、「歴史学者と人類学者の双方から無視されてきた」肥後では一家、肥前では三家の洪江氏に伝わる膨大な文書群を相次いで「発見」し、約十年を要してその悉皆調査と、一部は影印・釈文付きの目録四冊（田上二〇〇五、二〇〇七、二〇〇九、二〇一〇）の刊行をなし終えた。その洪江家文書群のみならず、雑多な刊本中にも散見する洪江家の歴史記録の断簡も努めて善用して、石田の右の如きエスノヒストリー観とその志向性に大旨沿った河童論をこれから小稿で展開して行きたい。

従来は、古辞書類や、本草学・博物学の河童観・河童像に基づき、河童を外側から客観的に物として把握しようとする姿勢に大きく研究が偏っていた。その決定的な欠落は、歌川龍平が「河童は、わたしどもに信仰に近い存在である」（本章第2節）と述べた様な「主観的」な——強いて言えば現象学的な——眼差しへの関心と注目、言わば信仰の対象でもあった河童の研究への志向性にあったのだ。

この点で、河童の他に類を見ない強味は、何と言っても、古くからの伝統を保ちつつ、今も生きた河童信仰を

司る肥前・肥後洪江氏の存在である。同氏は、(最長なら)鎌倉初期以来約八百年間、河童(兵主部)^{ひょうすけ}信仰の家々として存続し、少なくともほぼ九州全域の種々雑多な「河童」信仰や伝承の形成と波及に直接的・間接的に多様な影響を与え続けて来たと言えるからだ。

それゆえ、河童のエスノヒストリー研究に於いて、筆者は石田の右の提言を是とするだけでなく、更にもう一つ別の、きわめて重要な志向性を加味したいのである。米国の文化人類学者レッドフィールド(Robert Redfield)が自らの中米研究の成果から導き出した、「大伝統／小伝統」(great and little traditions)理論がそれである。

都市部(識字的社会)の「大伝統」が村社会(小さな非識字的共同体)に圧倒的な力で迫って来る時、現地の人々は自らの社会・文化の各々の傾向と受容の力量に応じて「大伝統」を簡略に解釈し直しながらも即自的に、すなわち自らの社会・文化に幾分なりとも適合的にそれを「流用」する。そのような変容過程に於いて初めて独自の厚みのある「小伝統」、言い換えれば一定の広がりを持つ「民俗」(folklore)が胚胎し、独自の形成・発展を見ると言える。筆者は、こうした見地から、村々の伝統の多くは個々別々にオリジナルに育まれるよりも、このような「小伝統」として発祥する契機を得る方が一般的だという見解を持っている。

橘諸兄を鼻祖とし、源頼朝に近習したその子孫である橘公業が鎌倉時代の初期、嘉禎三年(一二三六)に九州に下って肥前国長島荘に入部し、一気に在地領主化した。都の識字文化に深く浸ったその嫡流こそが洪江氏であり、その洪江氏が形成した原河童信仰の大伝統が九州各地の非識字的な村々の河童に関する小伝統形成に絶大な影響力を長く發揮して来たと見るのである。

二、長めの助走（2）——本草学的河童論再考

さて、渋江氏の河童信仰の大伝統を巡る歴史的な考察を始める前に実施しておくべき方法上の検討が、まだ他にも残っている。無論、その一つが、前章の末尾で触れた、考察の対象を物として客観視する傾きが著しい河童研究の従来の方の、根本的な再検証である。

ただし、筆者の河童研究がいわば「信仰としての河童」の伝統の解明に重きを置くものである以上、その再検討は網羅的であるよりも、むしろ戦略的に、些か簡易的たらざるを得ない。実際、或る少壮の研究者の手になる、枝葉末節の論点には無闇に深入りしない軽快な論考（小澤 二〇一一）の方が優れてエレガントであり、大局的な見通しを得る上で汲むべき有益な示唆を与えてくれた。

1. 西国から江戸へ進出する「河童」

その小澤論文は、「河童」（つまり、広義の河童）が今日の一般的なイメージに辿り着いた歴史的な変遷過程を、文献資料にも触れつつ、「画像資料を中心に」明らかにしようとした。文献資料を扱った前半部は小澤の論の土台作りの一環として有効だった。しかし、忌憚なく言えば、従来の文献研究に通常の決定的な理論的難点をまだ脱していない——本章第3節で展開する論評参照。他方、画像資料に肉薄した後半部は、率直で若々しい獨創性が大切な発見を導いていて、新鮮で刮目に値する。細部は原論文に譲るとして、一通りその要約を試みてみよう。

「河童」の図像が先ず最初に現れるのは、大坂の医師寺島良庵の『和漢三才図会』（一七一二）中（原著では「河童」は川太郎、一名川童〔かわろう〕）で、登頂部が窪み両手に水掻きがある他は、猿の姿を彷彿とさせる。

同時代には、中国の「水虎」に「河童」を宛てる論者が多かったが、良庵は両者を明確に区別して河童の直前に水虎を別途立項し、それには『本草綱目』から引用した、はっきりと異なり方が分かる別図を付している。

一八世紀の特徴は、『和漢三才図会』、平瀬徹斎編著・長谷川光信画『日本山海名物図会』（一七五四、名称は河太郎、関東では河童〔かはわらは〕）、春名忠成著『西播怪談実記』（一七五四）等の如く、猿に似たイメージで「河童」が描かれる趨勢にあった。また、今挙げた三点の全てで「河童」出現の舞台が西国（西日本）とされている事実は重い。

ただし、一八世紀も後半になると、それらと全く異質な「河童」が江戸でも描かれる始める。その典型が、名高い鳥山石燕の『図画百鬼夜行』（一七七八）中の絵図であり、その「丸い目、横に大きく広がった口、皮膚の模様やぶよぶよした質感、甲羅」が蛙や亀を連想させる。そして、それらを追うように、江戸でもまた「河童」出現の噂が人々の口の端に上り出したのだった。

根岸鎮衛著『耳袋』（二七八四起筆、一八一四成立）「巻の一」に出る、天明元年（一七八一）仙台河岸の伊達家蔵屋敷で撃ち殺された「河童」の絵図では、甲羅様の物や「頭の皿のようなものと放射状に伸びた毛髪がなければ河童と判断がつかない」（小澤 二〇一一、三五）。出現譚の虚実はともかく、それまで図像的に関西に偏って分布していた「河童」が「江戸を舞台としても描かれるほど注目され」（小澤 二〇一一、三五）、江戸風の独自の像容を得るようになった。それらの絵図では、化け、人を水中に引き込み、尻子玉を抜いて殺す、その恐ろ

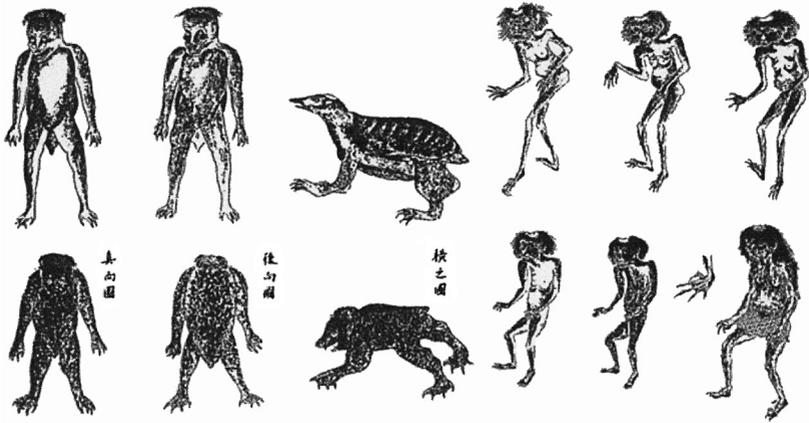


図1 小澤（二〇一一、三七）「水虎」

しさが強調されている。

つまり、西国では多くの場合（赤くて）毛深い猿イメージが強いが、江戸では中期・後期に（緑色をした）亀や蛙のイメージが現れ、また「相撲をとる、駒引きを失敗して手を切られる、尻子玉を抜く、人間に崇るなど」（小澤 二〇一一、三六）、その属性の描写が多いことを、一八世紀の特徴として挙げられる。

次いで一九一二〇世紀にもまた像容が大きく変化した。例えば、本草学者栗本丹州が著した『千蟲図』（序、一八一）は、水虎に見立てた「河童」をいかにも図鑑らしく正面・背面・側面の三方向から描き、水虎は亀の類だと添書している。つまり「この時期には、文献でも図像でも、はつきりとした『河童』イメージが形成されていた」（小澤 二〇一一、三八）のだ。

以上の整理を基に、小澤は「いわば『河童の専門書』たる古河 侗庵編『水虎考略』（二八二〇）所収の「水虎」図一三点（図1）にスポットライトを当てて、実に興味深い比較考量を試みた。足のみの一点も含む、向って右側七点は、豊後国日田近隣（の筑後川・山国川水系、小馬注）での河童遭遇者数人からの聴取記録集である

『河童聞合』⁽²⁾中の絵図の複写であり、どれも皆猿の風貌に似る。逆に、向って左側の六点は鼈らしい特徴が目立ち、その内、下側の三点は上記『千蟲図』に基づいて描かれているようだ。

要するに「『水虎考略』は、猿イメージと亀・スッポンイメージの差異がよくわかる（まさしく恰好の、小馬注）資料であって、この時期は、学者や医師などいわゆる知識人の間で、こうした『河童』の図像が出回り、転写も繰り返されていた」（小澤 二〇一一、三八）ものと推定できる。

2. 錦絵がもたらした大転換

大略以上のような内容だけなら、中村禎里（一九九六）のより多角的な分析も別にある。だが、小澤の本領と新たな貢献はむしろこの先だ。すなわち、「河童」イメージの一層の大転換が「錦絵の中で起きた」とし、三代目歌川豊国、歌川国芳、遠浪斎重光等の仕事に即して大柄に、次のように論じた功績は大きい。

豊国では亀と蛙の要素が混在し、国芳では甲羅も消えてより蛙っぽくなる。重光の『かつぱづくし』では「表情も豊かで、滑稽さに満ち」、またよく触れられる胡瓜も見えて、河童の好物の知識の浸透ぶりが窺える。そして、人の側では恐れの色が全く見られなくなっている。

一九世紀を通観すれば、初期は手斬り等、「河童」の逸話や属性に焦点があつたものの、やがて本草学的な関心が高まると『千蟲図』を手始めに学術的な図柄へと関心が向かって行って、亀や鼈のイメージが強調されるようになる。次いで庶民の娯楽に供する錦絵が登場して、大きな変化が生じた。蛙似のものや蛙が甲羅を負ったような小柄な「河童」の像が多くなり、愛嬌や滑稽味も加わって来る。すると、こうした怪異性の希薄さも手伝っ

	江戸	西国
18世紀 ↓	(後期) 猿イメージとは明らかに異なるイメージ ★亀や蛙がモデルにあると思われる	猿をイメージしたと 思われる絵が多い
19世紀 ↓	(前期~中期) <ひとつ目のイメージの転換期> ★知識人の中で亀・スッポンイメージが定着 (中期~後期) <ふたつ目のイメージの転換期> ☆錦絵：蛙+亀イメージ 可愛らしさや滑稽さが表現されるようになる	
20世紀 ↓	☆漫画・テレビCM・町おこしなどのマスコットキャラクターとしても登場	
21世紀		

図2 小澤（二〇一一、四一）「河童」画像資料の流れ

て、河童の人気の向上にも繋がって行った。この流れが、明治時代以降、小川芋銭や清水昆の画業を介して、一層人間的なイメージを強めたと言える。

ほぼ以上の如く概観した小澤は、その変遷過程の要点を分かり易く図2に纏めて示す。

そのうえでなお小澤は、「なぜ猿イメージから亀やスッポン、蛙のイメージに変化していったのか」（小澤 二〇一一、四二）と、敢えて究極の疑問を今更の如く呈している。そして、大胆にこう締め括る。「西国に猿イメージが多かったように、『河童』についての情報が、そもそも江戸においては猿イメージではなく、亀・スッポン・蛙イメージだった可能性もある」（小澤 二〇一一、四二）。まさしく明快で、且つ粘り強い検討を経て鋭的を射抜いた、逸すべからざる論点と言うべきであろう。

3. 河童は、はたしてカッパだろうか？

さて、これまで触れないで来た、小澤論文の或る特異な表記について、ここで論じておかねばならない。小澤が、論文標題を初めとして、

河童に言及する時には旁を惜しまず、逐一角括弧を施して「河童」と表記している。それは、一体何故だろうか。筆者なりに推し量れば、恐らく次のように言えそうだ。

諸文献に於けるいわば「河童のような物」の漢字表記(①)は、河童、川童、川太郎、河太郎、川郎、河郎、河伯、水虎等々諸々で、その(説明文やルビ等による)音表記(②)もまたカッパ、カハラハ、カハワツパ、カハラウ、カハタラフ、カハク、カハノカミ等々とやはり区々であり、必ずしも統一性がない。それらの外形と内容を広く比較考量する目的で、①と②の各一要素の組み合わせからなる各々の対の全てを内包とする記述概念を設定して論述を可能にする方法的な工夫、それが「河童」という角括弧付きの単一表記の採用だっただろう。すなわち、柳田が「河童ニ異名多シ」と言い捨てて足早に、且つ曖昧にやり過ぎた方法上の隘路を看過せず、真摯にそれを乗り越えようと工夫したのである。

小澤が直面した隘路は、本来、専ら古文獻に依拠する従来の「河童」研究者が、共通して経験せずには済まないものである。そこで彼らは、河童に言及したと見なし得る、可能な限り多くの古文獻の、可う限り多数の異本を参照・校合して、河童概念の起源と変遷過程を推定する試みを追求し、実践して来た。だが、依然として解決からは程遠く、むしろ混迷の度を深めたときさえも言える。そこには、実は、秘められた深遠な盲点があるからである。

小澤は、中村禎里が『「河童」に関する文献・図録である『水虎考略』(古河侗庵編、文政三(一八二〇)年刊)に掲載された絵の出典やモチーフなどを詳しく考察したこと]に触発される一方、その「範囲は錦絵までには及ばなかった」(小澤 二〇一一、二二六)と明敏に気づいた。そこで、錦絵の登場による「河童」イメージの

変遷の検討を追加して、先述したとおりの新たな眺望を切り開いたのであった。

しかしながら、錦絵も含めた図録・図絵の分析は、画像には画面上に（時には夥しい量の）添書を伴うがゆえに、書誌的研究一般が避け得ない隘路に同じく到ることを免れないことになる。

その隘路たる根源的な問題とは、正書法無き日本語の文字表記に特有の、漢字を用いた和語の文字化を追求して来た歴史、つまり無文字の和語が書き言葉を獲得する過程で現実を抱え込んだ、豊かであると共に、極めて複雑で厄介な振じれ現象の存在なのである。

国語学者亀井孝が最初に、その振じれによる日本語書き言葉の呪縛的な一局面を「よめるけどヨメない」と言い表して、巧みに浮上させてみせた（亀井 一九五七）。それを、日本語学者今野真二が次のようにあらためて紹介し、解題している。

亀井孝（一九五七）は「春楊葛山登雲立座妹念」（『万葉集』巻十一、二四五三番歌、小馬注）のように、漢字によって文字化されている日本語を、具体的な日本語にまでもどす操作を「ヨミ・ヨム」、内容を理解することを「よみ・よむ」と表示して、「読み」に二つの相 (Phase) を設定した。具体的な日本語にもどすことはできない。しかし内容〓言いたいことはわかるといふ場合は、「よめるけどヨメない」ということになる。

（今野 二〇二四、三〇〇）

つまり、「春になって芽を出し始めた柳の美しい葛城山に雲が湧き立って止まないがごとく、愛しいあの娘を

思わずにはいられない」（小馬試案）という、当該の短歌のおおよその文意は推し量れる。漢字は、元来中国語の（基本的に）一字で一語を表す「表語文字」(logogram)だからである。一方、それがどんな和語の音声を文字化したものなのか、つまり元の話し言葉の有様が何だったのかは、見当が付かない。これが、「よめるけどヨメない」という、切実な、言語的隔靴搔痒状況なのである。

さらに、もう一つ河童を巡る「看過された大問題」があると筆者が考えて来たのも、この状況を踏まえてのことだ。その大問題とは、日本の古辞書である『下学集』（一四四四）や、それを踏襲した『節用集』（一四六九—八七以前）に初て現れる河童という「漢字列」³を、専ら文献に依存して来た河童研究者たちがカッパの存在を歴史的に証する漢字表記だと信じて疑わず、諸々の立論の揺るがぬ根拠として来た「慣行」である。

実は、この「慣行」もまた「『下学集』以前、『倭名鈔』以後、歴代ノ語彙ニ其ノ（河童という、小馬注）名目ヲ掲ゲズ」（柳田 一九八九、九八）と喝破した、柳田国男の『河童駒引』に淵源するに違いない。つまり、彼らはこの発言を裏返して、『下学集』以来の諸辞書類の中に「河童」という文字の出現を網羅的に探し求めた。そして、『下学集』以下の辞書等に出る「河童」の文字（実は、以下で触れる「漢字列」を何の疑いも抱かずに「カッパ」と読むという、誠に短絡的な判断を慣行として来たのである——この点でも、彼の見解を無謬として疑わせないほど、柳田の権威は今もなお誠に絶大である。

その河童という漢字列は、実際には東国のカッパではなく、「カハラウ」（カワロウ）という西国の一語（話し言葉）を漢字を用いて文字化したものだったと見なければならぬのだ。それは、例えば、国会図書館が公開している『下学集』の写本の「巻之上、気形門第八」の、頼の項を根拠として次の通り立証できる。

そこには、（敢えて分かりやすい釈文の形に整頓して示せば）「獺 老而河童ト云者成⁴」とごく手短かに書かれていて、その「而」と「童」の各々右側にはそれぞれ「テ」、「ハラウ」とルビが振られている。つまり、「河童」という「漢字列」の「河」は「カ」と発音される（のが自明だ）から、全体で「河ハラウ」、つまり「カハラウ」となる。要するに、この一文を「獺 老テカハラウト云者ニ成」と読むことを求めているのである。

大切なのは、河童が河伯や水虎のような中国語（漢語）ではないことだ。和語だから、それらとそのまま同列には扱えないことは多言を俟つまでもない。要するに、この河童という表記がその「カハラウ」という口語の和語を（書き言葉として）文字化する工夫として、日本で独自に作られた漢字列であることを、『下学集』の獺の項目の実態が鮮明に教えてくれるのだ。古辞書類を読む場合、国語学・日本語学に基づくこうした論理的で批判的な読みが欠かせない。

さて、小澤論文を介して既に縷々論じた通り、甲羅と皿を身につけた亀Ⅱ蛙風の現今の河童イメージが生まれたのは、たかだか近世後期の江戸に於いてであり、且つ「カッパ」はまさしく柳田が述べた如く「東京語」に過ぎなかったことを想起したい。この時、柳田の指摘を鵜呑みにして、『下学集』の獺の項に出る「河童」という漢字列を「カッパ」と読み、現今の河童を想起して疑わないとすれば、その時空認識の乱れは甚だしく、即座に論理が雲散霧消して思考停止に陥るのは明らかだ。遺憾にも、『下学集』に最初に言及した柳田国男にはこのような批判的な認識が無かったと、深く心に銘ずるべきである。

『下学集』・『節用集』の後長い間、河童類似の項目はどんな形でも辞書類に現れず、漸く、いわゆる『日葡辞書』（長崎書林、一六〇三、原題 Vocabulario da Lingoa de Iapam）がおよそ百五十年後に現れ、その中に

‘Caturo’が史上初めて立項される。『邦訳日葡辞書』は「Caturo カハラウ（河郎・河童）猿に似た一種の獣、川の中に棲み、人間と同じような手足をもっているもの」（傍線は小馬）と翻訳している。

しかしながら、その内容からしても、それはカッパではなく、西国のカハラウ（カワロウ）の釈義であることは明らかであり、‘Caturo’はポルトガル語のアルファベット（表音文字、phonogram）でカハラウを文字化したものだと見なければならぬ。『邦訳日葡辞書』が「（河郎・河童）」の日本語表記を何の解釈も説明もなく並列して加えたのは、日本人の便宜を旨に、恐らくは『下学集』の頼の項を参照してのことであろう。しかし、この緩く曖昧な記載を加えた判断は大きな過誤であつて、単に河童研究のみならず日本語史研究、特に語彙史研究上、徒らに混乱を招く重大なものだと指摘しておきたい。

大方の河童研究者は、国語学者でも言語学者でも無論なく、こうした事情と言語学・国語学の理論には概して疎い。だからと言って、一般の好事家に伍して、和語の文字化の歴史的な実践過程に見られる厄介な言語現象の振れへの的確な洞察を欠いて済ませてしまえば、研究としては、当然論外と言うべきであろう。

おわりに

遺憾ながら、今号は紙数が尽きた。そこで次の展開を予告して、一種の橋渡たしとしておきたい。河童を関東方言の（カワワツパ或いはカワワラワが詰まった）カッパと読むことが諸国の知識層の間でも通例化するのも、やはりずっと後、江戸の錦絵に河童が登場し、盛んに出現譚が江戸市中を賑わすようになってからのことだろう、

と。ここでも、「河童」を巡る東西の事情の大転換があったと見なければならぬのだ。

いずれにしても、次の（その2）では、冒頭で本節後半部の内容をより丹念に、且つ具体的な裏付けを示しつつ詳しく再説し、大方の一層の理解を得る必要があるだろう。（続く）

【謝辞】

亀井孝先生は、修士課程、博士課程を通じて筆者の副ゼミの指導教官だった。言語学の素養の乏しい筆者は、いわば「門前の小僧」であり続け、ちゃんとした研究者になれるのかと心配もお掛けた。それでも門前の小僧なりに聲咳に接した恩恵は大きかった。老境に到って先生の業績に思わぬ仕方ながら、ごく軽くでも触れる機会を得たことが嬉しい。草葉の陰で先生が却って心配を募らせられたのではないかと案じつつ、感謝の念を新たにしてお祈りしたい。

《注》

（1）芥川が河童に強い関心を抱き、昌平黉の教官を勤めた儒者古河侗庵が編んだ『水虎考略』（一八二〇）や柳田の『河童駢引』・『遠野物語』を愛読したと推測できる。もともと、「河童」中、主人公に河童とは何かをくさり語らせる節の「三」で、「西国の河童は緑色であり、東北の河童は赤いという民俗学上の記録を思い出しました」と言わせているが、事実は逆である。恐らく、「外の地」には河童の顔は青しといふやうなれど、遠野の河童は面緒きなり」（『遠野物語』五九話、傍線は小馬）という文言が強く念頭にあったものと思われる。実は、この文脈での「外の地」は、東日本、或いは東北地方の他の土地の意味に解するのが妥当なのである。

芥川のこの残念な勘違いが、柳田の河童観、またはイメージも（少なくともその肌色については）日本の東西で二分されていた事実、思いがけず注意を促してくれる。なお、遠野がその例外である事情は、小馬（二〇二二）が詳細に分析している。

(2) その現場の実地踏査を踏まえた詳細な論評は、小馬(一九九六)第5節「河童を愛し、河童を生きる人々」(七七四―八三二)を参照されたい。

(3) 今野は、構造言語学者ソシュールの言語学に無かった固有のアプローチから、「漢字列」を初めとする「文字列」の概念を提唱して、日本語の複雑な面白さを巧みに捉えようとしている。彼の著者(二〇二四)の支柱となる概念である。

(4) 遺憾ながら、次の機会に、原典の影印を示して一層綿密に考察することを期したい。

《参考文献》

石田英一郎

一九九四 『河童駒引考』、岩波書店。

小澤葉菜

二〇一四 「河童」のイメージの変遷に付いて——画像資料の分析を中心に、『常民文化』34号、二三一―四六頁。

香川雅信

二〇〇五 『江戸の妖怪革命』河出書房新社。

亀井 隆

一九五七 「古事記は読めるか」、武田祐吉(編)『古事記大成』3(言語文字篇)平凡社、九七一―一五四頁。

川田順造

一九九七 「日欧近代史の中の柳田国夫」、『成城大学民俗学研究所紀要』第二集、三八―六六頁。

小松和彦(編著)

二〇〇〇 『河童』(怪異の民俗学、第3巻)河出書房新社。

今野真二

二〇二四 『日本語と漢字——正書法がないことばの歴史』岩波書店。

小馬 徹

一九九六 「河童を見、恐れ、愛し、生きる人々」、田主丸町誌委員会（編）『川の記憶』（田主丸町誌、第1巻）田主丸町、五三七―一九一七頁。

二〇一二 「北の河童・南の河童とその時代」、神奈川大学常民研究所（編）『歴史と民俗』第28号、一八三―二二三頁。

田上 繁（編）

二〇〇五 『洪江公昭家文書目録（一）』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科。

二〇〇七 『洪江公昭家文書目録（二）』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科。

二〇〇九 『洪江公昭家文書目録（三）』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科。

二〇一〇 『肥前洪江諸家文書目録』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科。

田中克彦

一九九四 「解説」、石田英一郎『河童駒引考』岩波書店、三〇―三二七頁。

常光 徹（編著）

二〇一四 『河童とはなにか』岩田書店。

土井忠生・森田武・長南実（編訳）

一九八〇 『邦訳日御辞書』岩波書店。

中村禎里

一九九六 『河童の日本史』日本エディタースクール出版部。

和田 寛

二〇〇五 『河童伝承大事典』岩田書店。

柳田国男

一九八九 『柳田国男全集』 第5卷、岩波書店。

一九九二（一九一〇） 『遠野物語』 岩波書店。